

平成28年度第1回文化ディスカッショングループ議事録

1. 開催日時 2016年6月7日(火)13時00分～15時00分

2. 開催場所 虎ノ門ヒルズ森タワー9階 会議室TOKYO

3. 出席者(五十音順)

文化ディスカッショングループメンバー

青柳正規委員長、市川海老蔵委員、今中博之委員、織作峰子委員、絹谷幸二委員、コシノジュンコ委員、
篠田信子委員、セーラ・マリ・カミングス委員、松下功委員、山崎貴委員

教育ディスカッショングループメンバー

真田久委員、深澤晶久委員

臨時委員等

高原 剛 臨時委員(内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局企画・
推進統括官)

磯谷 桂介 臨時委員(文化庁長官官房審議官)

桃原 慎一郎 臨時委員(東京都生活文化局次長)

組織委員会事務局

布村副事務総長、佐藤副事務総長、中村企画財務局長、小幡企画部長、堀アクション&レガシー担当課長、
小林アクション&レガシー担当課長

4. 議事次第

1. 文化オリンピックのコンセプト
2. 文化オリンピック 事業体系と認証の仕組み
3. リオ大会後の展開

5. 配布資料

資料1:文化オリンピックのコンセプト

資料2:文化オリンピック 事業体系と認証の仕組み

資料3:リオ大会後の展開

資料4:文化・教育委員会名簿

資料5:ディスカッショングループ・分割割り

参考資料:都における文化プログラムの展開について(東京都資料)

6. 議事録

○布村副事務総長

定刻になりましたので、ただいまから、今年度第1回目になります文化ディスカッショングループを開催させていただきます。委員の皆様方には御多用の中お集まりをいただきまして、また雨の中ありがとうございます。広く国民の方々に開かれた組織委員会を目指そうと、その試みとして本日の会議は公開とさせていただいており、報道関係のカメラの方も入っていらっしゃいます。今後も可能な限り公開とさせていただきたいと思っておりますので、あらかじめ御承知おきお願い申し上げます。

最初に開会に当たりまして、委員長から一言御挨拶をいただきたいと存じます。宮田前委員長が東京藝大の学長から文化庁長官へ御就任されたことに伴って、この文化・教育委員会の委員長を御退任され、新たに前文化庁長官の青柳正規委員長に御就任をいただきました。東京大学名誉教授という肩書になりますけれども、最初に青柳委員長から御挨拶をお願いいたします。

○青柳正規委員長

御紹介いただいた青柳でございます。私はギリシャ・ローマの文化史を中心に研究をしているものですから、古代のオリンピックは大体よくわかっております。ギリシャのオリンピアに行くときゼウス神域があって、ゼウス神域の北側のところに、いわゆる倉庫、テサウロスというのがあって、そこで優勝した人たちのいろいろなものをおさめたりするような場所があります。そして、その頃から詩の朗読などがオリンピックでは大変に重要なイベントでありました。それがこの近代オリンピック、そして現代オリンピックで、さらに文化というものに注目が集まり出しているということは、大変すばらしいことです。それが近代オリンピックの父のクーベルタンの思いでもあったのではないかと思います。

皆さんのさまざまなお知恵を拝借しながら2020年に向け、あるいは2020年の後のレジェンドづくりということでも大変重要な役割を担うことになると思うので、ぜひよろしく願いいたします。

○布村副事務総長

青柳委員長、ありがとうございます。また文化・教育委員会の中で2名の委員の方々の交代がございました。お二人とも今日は御出席いただいておりますが、お名前の紹介をさせていただきます。羽入佐和子委員が御退任されたことを受け、銭谷眞美東京国立博物館長が新委員として就任いただいております。それから全日本中学校長会の伊藤前会長が御退任されて、榎本智司新全日中の校長会の会長が新しい委員として就任いただいております。

それでは、本日の議事に入りたいと思います。

本日の議事といたしましては、次第にありますとおり一つ目は文化オリンピックのコンセプト。二つ目は、文化オリンピックの事業体系と新たに取り入れたい認証の仕組み。三つ目には、リオ大会後の展開という三つの議題、三つの資料を用意させていただいております。

先ほど青柳委員長から古代オリンピックのお話いただきましたが、私も今年の連休前にリオオリンピックのための聖火の採火式に出席しました。古代オリンピックは、そのエンシェントオリンピアという形の地名にもなっていて、3,000年前から続いている歌とか踊りのパフォーマンスが、今も肅々と受け継がれていたというのが、一つ印象的な場面でした。

それでは早速事務局より、資料の御説明に入らせていただきます。資料1について、堀課長から御説明をお願いいたします。

○堀アクション&レガシ-担当課長

それでは、御説明をさせていただきます。

資料1、文化オリンピックのコンセプトにつきまして御説明をいたします。昨年来の文化・教育委員会で御議論をいただきまして、アクション&レガシープランの中間報告を取りまとめました。この中間報告に基づき、文化オリンピックのコンセプトを策定しました。まず、資料1ページをお開きください。文化は、スポーツと同様、人々に感動を与え、豊かな人間性を涵養し、想像力と感性を育むなど、人間が人間らしく生きるための糧となるものでございます。これらはオリンピック・パラリンピックの精神に通じるものでございまして、オリンピック憲章においてもオリンピズムはスポーツを文化・教育と融合させ、生き方の創造を探求するものであると、文化の重要性についてうたっております。

オリンピックはスポーツと文化の祭典でございます。我々大会組織委員会は、政府、東京都、スポンサー、全国の地方公共団体、文化芸術団体等と連携をいたしまして、より多くの人々をオリンピック・パラリンピックに巻き込み、全国各地における気運を盛り上げるため、文化オリンピックを展開していきたいと考えております。

次、2ページを御覧ください。文化オリンピックはビジョンにございまして、「みんなの輝き、つなげていこう」をビジョンとしまして、文化の祭典としてあらゆる人々が参加できるプログラムを全国で実施し、地域を活性化すること。また、多くの若者に文化・芸術への参加機会を促進し、創造性を育成することを目標としたいと考えております。

続きまして、3ページでございます。文化オリンピックのコンセプトでございます。大会ビジョン、「全員が自己ベスト」、「多様性と調和」、「未来への継承」。また、残すべき四つのレガシ-コンセプト、以下に示しております四つのコンセプト。これらの実現に向けまして2020年までの4年間、さまざまな主体のアクションにより文化オリンピックを展開し、オールジャパンで盛り上げていきたいと考えております。私からの説明は以上でございます。

○布村副事務総長

最初は、資料1の文化オリンピックのコンセプトについてでございます。後ほどゆつくり自由討議の時間はありますが、この資料に関連して何か御質問、御意見がございましたらお願いいたします。

○中村企画財務局長

文化プログラムのビジョンについて補足の説明をさせていただきます。2ページにありますとおり、「みんなの輝き、つなげていこう」、でございますが、4月の末に2020年の大会の新エンブレムが決定いたしました。皆さん御覧になったかもしれませんが、あのエンブレムは三つの異なる四角形がオリンピックエンブレムもパラリンピックエンブレムも45個ずつ組み合わせてできております。作者の野老さんによりまして、その一つ一つの四角形が、一人一人、形は異なれども頑張っていこうという思いを込めているということでございます。

まさにその思想が我々の大会ビジョンと合致しておりまして、一人一人が自己ベストを目指そうと、多様性と調和と、あとはそれを未来につなげていこうというのが2020年の大会ビジョンでございますので、このエンブレムのあらゆる意味とビジョンをあらゆる言葉として、この「みんなの輝き、つなげていこう」ということを、エンブレムにつけ加わるタイトルのようなメッセージとしてつくった形となっております。そのエンブレムのメッセージが、我々が目指す文化プログラム、あるいは教育プログラムのコンセプトとしてぴったり来るといことで、ここに掲載させていただいている次第でございます。

○布村副事務総長

それでは、資料2のご説明をさせていただきます。

○堀アクション&レガシ-担当課長

それでは、資料2、文化オリンピック事業体系と認証の仕組みにつきまして、御説明いたします。認証制度の目的でございます。我々組織委員会と政府、開催都市である東京都などが一丸となって、全国各地で文化の取組みを展開しまして、エンゲージメントを広げるために文化プログラムとして認証する仕組みを構築します。

次に、認証の事業体系でございます。公式文化オリンピック事業と関連文化オリンピック事業の二つがございます。公式文化オリンピック事業は、組織委員会が主催、あるいは開催都市である東京都、政府、スポンサー企業などのステークホルダーが主催する事業でございます。組織委員会の管理のもと実施し、OCOGマークを付与する事業。OCOGマークというのは、資料のリオ大会のものを例に掲げてございます。関連文化オリンピック事業は非営利団体が主催し、東京大会の機運を醸成し、ムーブメントを裾野まで広げる事業で、いわゆるNCマークを付与する事業でございます。

続きまして、2ページを御覧ください。認証の基礎要件でございます。こちらは、事業の申請要件になりますが、こちらの表に記載しておりますとおり、公益性があること、参加可能性、無料の事業であるとかボランティアの活用、そういったより多くの人々に参画いただけるような工夫をしていること。悪質なものであること、非営利活動的な活動であるといった要件を満たしていることを要件として考えております。また、東京大会のマーケティングルールを遵守することも要件とさせていただきたいと考えております。

次、3ページを御覧ください。認証対象となる取組みでございます。どのような取組みが対象となるかを示しております。大会ビジョン及び文化オリンピックのコンセプトを、実現する事業内容かどうかを総合的に審査することになります。大会ビジョンをまず基準としておりまして、全員が自己ベスト、多様性と調和、未来への継承。この3点を掲げておりますが、対象となる取組みのイメージとしては、例えば全員が自己ベストであれば、他の分野のジャンルとコラボレーションするであるとか、海外のアーティストと共同で新たな表現手法による公演を行う、そういった新たなチャレンジ。多様性と調和であれば、特定の地域や団体など限られた範囲を対象とする内向きの取組みではなく、例えば地域を超えて、国を超えてあらゆる人が参画できる開かれた取組み。未来への継承であれば、2020年以降も継続していく取組みであるといったことを求めたいと考えております。以下、文化オリンピックのコンセプトに基づくものとしても、基準と取組みのイメージを示してございます。

次に、4ページを御覧ください。認証のプロセスでございます。認証のプロセスとして、申請の流れとして組織委員会が政府や東京などから申請を受け付け、必要に応じてIOCと協議し、認証していくこととなります。また今後、全国各地で文化オリンピックを展開していくために、地方公共団体などとの連携を強化してまいりたいと考えております。審査のプロセスでございますが、申請書類を受け付けまして、公益性や非営利性などの基礎要件適合審査を行いまして、文化・芸術性の審査を行い、必要に応じてIOC・IPCと協議しながら承認することとして考えております。私からの説明は以上でございます。

○布村副事務総長

資料2の文化オリンピック事業体系と認証の仕組みの説明になります。1ページ目のOCOGマークというのは、組織委員会マークとOrganising Committee Of The Olympic Gamesということで組織委員会のマークという意味で、そのエンブレムに左に、ブラジルのポルトガル語でcelebraという愛称を入れて、文化プログラムに対する認証マークとして付与されるものになります。

組織委員会としてはなかなか財政的な支援もできないので、こういう認証をさせていただいて、マークを付与して応援をさせていただくと、そういう役割を果たすこととなります。

ロンドンオリンピックでは文化プログラムが十数万件実施をされて、オリンピック大会、パラリンピック大会の盛り上げにつなげていただいたという流れがありますので、ぜひ2020年の大会に向けて日本の国内でもこういう文化プログラムを大きく展開できればと、それを支援する仕組みについてご説明させていただきました。

では資料3に移りまして、リオ大会後の展開ということをご説明させていただきます。

○堀課長

それでは、資料3、リオ大会後の展開につきまして御説明をいたします。文化オリンピック、今後の展開でございます。先ほど御説明申し上げました認証制度につきましては、8月ごろ公表・申請を開始できればと考えておりました、10月ごろから認証事業を開始していきたいと考えております。リオ大会後の展開といたしましては、この図に示しておりますとおり、リオ大会後、文化オリンピックのキックオフ。三つの段階を経て、開会前の東京2020フェスティバルにつながり、文化の全国的な取組みがレガシーとして未来に継承していくという展開を考えております。それぞれのフェーズにつきましては、まず第1フェーズ、フェーズⅠとして政府や東京都、パートナー企業を中心に展開。フェーズⅡとして拡大期間といたしまして、徐々に全国の地方公共団体や文化芸術団体に拡大していくと。フェーズⅢ、第3段階として全国展開を完了いたしまして、全国津々浦々で文化オリンピックが展開されているという状態を目指していきたいと考えております。

次に、2ページ目でございます。文化オリンピックのWEBによるPR、デジタルメディアの力で文化芸術に参画する人を広げて、国内外の祝祭感を創出していきたいと考えております。まずは、組織委員会のホームページ上で認証の仕組みを紹介するとともに、キックオフイベントなどの事業をPRしていきたいと考えています。来年度からは文化オリンピック専用のホームページを立ち上げて、いつどこで何のイベントをやっているか等の情報を発信し、またSNSなどを活用し、参加者との双方向のコミュニケーションができるようなムーブメントを拡大できる仕組みを構築していきたいと考えております。

リオ後の展開についての説明は以上でございます。次に、3ページを御覧ください。本日、委員の皆様文化オリンピックの展開について御議論いただきたいと思いますが、これまでの説明を踏まえ、議論の足がかりとして論点を示させていただいております。具体的な取組みと情報の国内外への発信と大きく二つに分けております。

取組みについては、例えば今後4年間を盛り上げて大会の成功につなげるには、どのような取組みが必要か。各分野の文化芸術団体が一丸となって日本の文化の魅力を発信していくには、どのような取組みが必要か。地域活性化のためには、文化事業をどのように活用するのが効果的か。発信につきましては、どのように事業をPRしていくことが効果的かなどを論点として挙げさせていただいております。私からの説明は以上でございます。

○布村副事務総長

資料1、2、3と御説明をさせていただきました。資料3の3ページ目に、一応論点はここに書かせていただきましたけれども、今後、2020年の大会に向けてどんな文化的な取組みをしていったらいいか幅広く御意見をいただければと思います。

また、本日は御欠席の小山久美委員から、メールで御意見をいただいておりますので、先に御紹介させていただきます。

○堀アクション&レガシー担当課長

それでは、小山委員からいただきました御意見を紹介させていただきます。読み上げさせていただきます。

文化オリンピックの実施には、これまで活動を続けている文化芸術団体の協力が欠かせないと思います。日ごろから苦しい運営状態にある芸術団体が協力をするには、やはり何らかの得るものが求められると思います。資金はその一つにはなりますが、限られた予算を考えると全ての団体が満足するものになることは考えられません。となると、観客動員の増加、つまり劇場に足を運ぼう、文化芸術を楽しもうという気運が高まることに対する期待が大きくなると思います。

そのためには、まずは文化プログラムの実施に関する告知に努めること。例えば、文化プログラムの象徴となるようなアンバサダーのような存在をつくる。公式スポンサーの広報に盛り込む。文化プログラムが盛り上がることによって、スポーツの祭典もさらに盛り上がるという流れを打ち出す。文化プログラムなら4年間楽しみながらオリンピックを心待ちにすることができることをアピールする。そのために、例えば文化プログラムの実施数、観客動員数をオープンにして、全国で目標達成を目指す。自分も観客となることによって、その一員になるという意識を持ってもらえるようにする。御意見、以上でございます。

○布村副事務総長

ありがとうございます。それでは、委員の皆様方から御自由に御意見をいただければと思います。

○今中博之委員

今中です、よろしく願いいたします。特に僕、障がい関係、パラリンピックとオリンピックのどういう形で結びついていくのかなというのを、とても意識をしています。当然、文化のほうもその結びつきが大事なわけで、この芸術団体ということに関しましても障がい者関係の芸術団体もたくさんあります。ただ、情報入手するのが非常に困難な方が多いということも言えると思います。その上で、その情報を発信していくときにも、少しここに書いてある多様性というのですか、情報の咀嚼も含めてやっていかなければならないようにと思います。

もう一つが、前々からちょっと気になっているんですけど、この会議と、例えば厚生労働省ないし文化庁、東京都がやっている同じような会議というのがあると思います。事務局に質問ですが、この会議とその他の会議、どういう形で現在リンクしていらっしゃいますでしょうか。わかる範囲で教えていただければと思います。

○中村企画財務局長

ありがとうございます。まず、第1点目の情報の発信の仕方につきましては、内容とやり方、両方気をつけていきたいと思っております。内容においても、その障がい者の芸術について、きちんとこういった取組みが全国で行われているということ発信するとともに、これはエンブレムのときにも今中委員にも御指摘いただいたところですけども、発信の仕方、やはり目が見えにくい方には音声で聞けるようにと。音が聴きづらい方には画像にもキャプションを入れたりと、

そういったことであらゆる方にきちんと情報がいくようなやり方を組織委員会としてやっていく必要があるのではないかと
思っております。

第2点目でございます。これは、いろいろな方から御指摘いただいております。国でも都でも、ほか経済団体でもさ
まざま文化に向けた取組み、そしてまた2020年に向けてさまざまな取組みを検討していただいております。ちょっと
それがいろいろ同時並行的に進んでいてわかりにくいのではないかという声もいただく一方で、やはり我々、どこかが一
つ全部を仕切ってそこだけがやるというよりも、うまく連携をとりながらより広い取組みを日本全国で進めていくには、共
同してやっていくのがよいのではと考えております。

その上で、我々組織委員会は、今日、東京都にも政府にも御参加していただいておりますけれども、そういう中で今
日お示した文化オリンピックというのを立ち上げまして、認証を通ったものについては、このエンブレムをちょっとデ
バイスしたマークをつくって、文化を盛り上げるとともに2020年に向けて盛り上げていきたい。必要に応じて東京都や
政府ときちんと手を携えてやっていきたいというふうに思っております。

○布村副事務総長

まず、組織委員会が一番広い受け皿になりますが、ただどうしても非営利という制約があります。その中で国であれば文化庁、あるいは47都道府県、特に東京都が中心となって具体的な活動の御支援とか引引っ張っていただくと、そういう役割をしていただくという形になるだろうと思っております。

今中先生からは、障がい者と芸術文化の話がありましたので、松下先生、藝大で障がい者の方と音楽、芸術とのコ
ラボレートをやってらっしゃるので、少しお話がありましたらお願いします。

○松下功委員

東京藝大では、数年前から障がいとアーツという企画をさせていただいております。なぜ実施しているかと申します
と、私は本当に感動したので、このようなすばらしいものを皆さんにぜひ見聞していただきたいと思っておりました。

我々は広くどんなジャンルの障がいの方、どんなジャンルの芸術の方もまとめて、芸術大学ですから芸術を中心に
考えていこうと思っております。今、我々だけがやるのではなく、地方の芸術文化団体、色々なところが一緒になって広
く多くの方々と連携をとろうとしています。幾つかの分野に分かれているような気がして、これが気になってしょうがない
んですけども、もちろん一つにする必要はないのですが、ロンドンのときのUnlimitedのような何か一つの見える場所とい
いますか、全体が俯瞰できるような組織か何かできたらいいなと思っております。少しそういう話も何人かの方々と始
めております。また御相談に乗っていただければと思います。

○深澤晶久委員

質問ですが、文化・教育委員会という枠組みの中、本日は、「文化」のディスカッショングループということですので、
私はオブザーバー参加をさせていただいております。

6月下旬の教育ディスカッショングループでも、同様の流れでご案内いただけるのかもしれませんが、教育プログラ
ムも同じように認証のようなスタイルで進めるのでしょうか。本日の内容は文化に特化されていますが、やはり文化と教
育は一對になって進めていくほうが良いのではないかと思います。本日は、教育プログラムという言葉は1カ所しか出で
きませんが、教育分野でもしっかりと議論して、それを合体する形でとりまとめたいただき、7月の文化・教育委員会で
取りまとめていくべきかと思っておりますが、そのような進め方と受け止めてよろしいでしょうか。

○中村企画財務局長

深澤委員のおっしゃるとおりでございます。6月の下旬に教育ディスカッショングループを開かせていただきまして、
そこで教育プログラムを御紹介しようと思っております。

たてつけは若干違っております、やはりメインとなるのは学校でございますので、文化プログラムのほうは、いろんな
取組みとかイベントを認証の対象にいたしますけれども、教育のほうは、まず基底になりますのは学校でございますの
で、オリンピック・パラリンピック教育をされている学校について、そういう学校だと認証していくこと推進していくことを考
えております。少々たてつけは異なっておりますが、文化と教育ということで、一對となってやっていこうと思っております。

さらに申し上げますと、ほかに五つの柱がございまして、スポーツであるとか、テクノロジーであるとか、復興であるとか、
いろいろな取組みを全て包含するような2020年に向けた取組み及びその後のレガシーに結びつけていくような形にし
たいと思っております。

○深澤晶久委員

教育分野は領域的には広がる可能性があります。そのときに、どこまでを教育プログラムとして認証していくのか、
今後の大学連携などを含めて非常に大事なところになると思われれます。特に文化は一番近い分野なので、教育プロ
グラムで発信はするものの、やっぱり文化性を非常に強く帯びるようなものも多くなる可能性がありますので、ぜひ連
携をとりながら、進めていければと思うので、ご指導いただきたいと思っております。

○布村副事務総長

本日は東京都から参考資料で、都における文化プログラムの展開についてという資料をお配りいただいております。
都における取組みを御紹介いただき、また議論のきっかけにさせていただければと思います。

○桃原東京都生活文化局次長

東京都生活文化局、桃原でございます。配付させていただいております参考資料に基づきまして、若干御説明さ
せていただきます。これまでも少し御紹介はさせていただいたところがございますが、東京都におきましては、昨年の3

月にオリンピックの文化プログラムの展開を見据えた東京文化ビジョン、それから2020年に向けた東京都の取組みを東京都として発表させていただいております。文化プログラムを進めていくという意思表示をさせていただいたところがございます。いよいよ今年の夏にリオ大会が行われて、それ以降、東京大会の文化プログラムの期間になるということになりますので、東京都といたしましても、できる限り目に見える形でスタートし、事業を展開するというようなことで、今日、御紹介させていただきたいというように思っております。

文化の関係者だけではなくていろんな方とお話すると、文化プログラムというのが、まだなかなか御認識いただけてないというようなところがございますので、オリンピックには文化プログラムもあるというようなことを世の中に印象づけるというようなことも含めまして、シンボリックな事業を展開するというのが一つ目でございます。

これまでもリオ大会まではプレ期間というのもございますけど、この期間を我々としてはリーディング時期というふうに位置づけさせていただきまして、伝統文化であるとか野田秀樹さんのプロデュースによる東京キャラバン、日比野克彦さんのプロデュースによる障害者アートのTURNなどを進めてきたわけでございます。この流れをとどめないように、リオ大会直後から切れ目なく事業を展開するというので、文化芸術、秋ということもございまして、秋に幾つかの事業を展開させていただきたいと考えております。東京都が主導する、主催するであるとか、共催に入るとか、そういったような形で秋口から晩秋にかけて様々な事業を行うことといたしております。

続きまして二つ目ですけれども、これは東京都が主導というか、ある程度深いかかわりを持つ事業でございます。それ以外に、民間が主導で行っている事業についても支援をするというような仕組みを文化プログラムに向けまして取り入れております。アーツカウンシル東京、助成機関を東京都が設置しておりますけれども、この中でオリンピック文化プログラムに向けました気運醸成プロジェクト支援、こういった新しい助成制度を今年度から開始をして募集をしているところがございます。

三つ目といたしましては、東京と各地が連携してオールジャパンとしての魅力を向上ということ。東京だけが盛り上がるということでは、大きな文化プログラムの展開にならないので、被災地も含めまして全国の自治体と東京都が手を取り合って事業展開をするということで、秋にも幾つかそういった試みを行うことを考えております。今後以上のような事業展開を図ってまいりたいというふうに思っております。

2016年スタートということでございますけれども、2019年のラグビーのワールドカップで大きな山をつくり、ピークを2020年の先ほど御紹介ありましたが、フェスティバルに持っていくというような形で、私どもとしてはできる限り広い方の参加を得て、事業展開してまいりたいと思っております。以上でございます。

○布村副事務総長

ありがとうございます。文化庁、あるいは東京都で引っ張っていただいて、いずれ他の46の道府県でも、どんどん文化的なプログラムが展開されていくような流れがつかれることを願っています。

同じく資料をお配りいただいておりますので、松下先生からSummer Arts Japanについてお願いいたします。

○松下功委員

今の障がいのお話ではないですけれども、どこか一つのチーム、あるいは一人がやるというのではなくて、連携をとってやればよいのではないかと考えています。障がいに関しても同じような考えですけれども、分野はそれぞれありますが、私が声をかけられる、まず音楽家から集まってみようと思いました。これは緩やかな連携ですが、いわゆるクラシック系純音楽系の、一般、あるいは公益の社団、あるいは財団の組織が集まりました。私が会長を務めているところも全国に400名の作曲家がおりますし、オーケストラも全国に幾つものものがあります。日本演奏連盟は、3,000名の音楽家が加盟しておりますし、オペラ系が二つ、プロのパレエ団の連合、合唱、そしていろんな作家の団体が集まりまして、緩やかなネットワークですが、みなさんお互いに連携をとりながらオリンピックの文化、あるいはその先へ目がけて文化を考えようねという会をつくってみました。

既に、毎月2回ぐらい集まって議論を行うなど、色々なことをしております。これには、まだ実は邦楽家が入っておりませんが、邦楽系で少しまとまったら連携をとろう、あるいは美術とか色々なところでネットワーク的に集まって、活発な活動ができればよいのではないかなと思います。

こういうメンバーの中から、文化プログラムは秋からかもしれないけど、やっぱりオリンピックイヤーの今年の夏から動いてみようではないかということで、Summer Arts Japan、これはミュージックと言わずにアーツと言ってます。あらゆる人たちが一緒に入ってきて、一緒にできないかなということ考えてみました。今年はリオのオリンピックイヤーですので、そこにエールを送るようなことがしたいなということで集まっております。

来年以降もこれは継続して、既にアジアの人たちから非常にオリンピックの文化に対して関心が集まっているので、皆さんの参加を呼びかけて、世界の人たちも参加できる。18年、19年は科学とかもっと融合させていこうと思っております。そしてオリンピックのときには、さらに大きな大会にして、21年、さらにレガシーとして続けていけるような音楽・芸術の祭典をしたいということで集まっております。

今年は小さな会ですけど我々で産声を上げようと思ひまして、日本のオリンピックの開催をしました東京・札幌・長野、この3カ所で同時に開催をしないかなという呼びかけをしましたところ、札幌も長野も市長も非常に乗り気で。それぞれ文化財の場所、善光寺とか豊平館とかいう文化財の場所で、同時に、例えばオリンピック賛歌は一緒に演奏したりして、各市を盛り上げたり、また各市のファンファーレや、その地域のレガシーも、前に行ったものを残していきたいと考えています。

障がい者の方も出ていただきますし、今年は台東区の子供たちとかいろんな方が、参加する形をとりたいと思っております。

今我々が一生懸命やっていることですが、Sports Arts Scienceという考え方を始めました。スポーツとサイエンスというのはよく組み合わせられていますが、最近ではアーツとサイエンスが非常に融合し始めています。その三つを一緒にして、スポーツから科学によって音につくり出して、それを作品まで仕上げていく。それにAIを、人工知能の考

えを今、持っております。ですから、スポーツ、アーツ、サイエンス、AIという考えを広めていこうと思います。

人工知能は今、どんどん広がっておりますが、我々とどう一緒に過ごせるかという提案をしていきたいと考えております。人工知能に対して、勝った負けたではなくて、芸術ですと一緒にできる可能性があるのではないかと考えております。将来、AIがどんどん広がっていったときに、どう一緒に仲よく暮らすという可能性も見出せるのではないかと考えております。コシノさんとも話ししながらファッションも入れて、多様なものを取り入れていこうと思ひ、今年、産声を上げようとしております。

まだ文化プログラムということではないですが、これに我々として今年立ち上がってみまして、この連携、MUSIC NETWORK JAPANという名前で、いろんなところが組織立っていけたら、今中先生のお話のように、障がいの方々も大きな取組みの場所ができて、ネットワークができる。ちょっと一つ先走ってみようと思った企画でございます。

○布村副事務総長

ありがとうございます。音楽の世界で早速引っ張っていただいております。今、お名前が出たコシノ先生は、デザインの世界、ファッションの世界は、こういう動きに何かやれそうな可能性はありますか。

○コシノジュンコ委員

先日、松下先生と芸大と一緒にさせていただきましたが、ベルリンフィルとお能のお囃子とファッションという三つの異質な組み合わせという、これは大変評判がよくて、お互いに初めましてというような格好ですけれども、やればできるという異質な関係というのは、新しい出会いというのは本当にクリエイティブなことができると思います。

ある意味で、そこに人工知能というすばらしい日本の技術を通じて、こういった一つ実験的なことというのを積極的に異質な組み合わせ、これは衣食住、いろんなところの組み合わせが可能になると思いますが、やはり2020年の大きなビジョンを持って、いろんなアートだけではなくて生活に至るまでいろんな関係が一つになって実験できる、また体験できるよいきっかけだと思ひます。

それと、東京だけの出来事ではなくて、これが成功すれば、例えば地方なり、全国に影響していくようなということがすごく大切で、このオリンピックというのは東京オリンピックではなくて、日本のオリンピックですから、日本津々浦々、いろんな一緒になって成功させていくことが必要だと思ひます。

特に、オリンピックとパラリンピックと二つ同時にということは、どうしてもオリンピックが先で、パラリンピックが後になってしまう。けれども、どういうふうにしたら一緒に成功できるのか考えることが重要であり、パラリンピックが成功することが日本のオリンピックの成功だと思ひます。特に障がい者という大変不自由で周りの理解というものが、まず慣れないというか、わからないし、一般にその身内になってみないとわからないんですけれど、やはりバリアフリーとか、そういうことだけではなくて、まず理解とか、東京だけの出来事ではなくて全国、それにもう少し研究して一緒になって楽しむという、理解のある日本、楽しむ日本という、本当に大いにオリンピックを楽しませていただかないと、こんなすばらしい出来事はないと思ひますので、まだまだ考えていかなきゃいけないことはたくさんあると思ひます。

特に、パラリンピックの選手たちは聞いていますと、みんな自費で参加するんだということで、一人じゃなくて周りの家族とか、いろいろ大変なものです。

そういうことで、これを一つ一つまだまだ考えなきゃいけないことがたくさんありますけども、リオが終わりましたら東京でするので、何カ月後なんですね、あつという間だと思ひます。だから、具体的に私は私でこういうふうにしたらという案はありますが、それをどういうふうに提案していいかわからないんです。

ですから、そういう場合は東京都に言うのか、それともここで話すのか、具体的な提案をしていって、どういうふうに計画ができるのかということがちょっと見えにくいものですから、皆さんそれぞれどういうことをしたいと考えていらっしゃると思ひますけど、まずグループごとに分かれて、例えばリーダーシップをとる方に全部お話しするとか、どういうふうにしたら具体的になっていくのかということが、ちょっと見えにくいと思ひますね。

ですから、この会だけではなくて、例えば外国から来た人も東京に来たら何かもう始まっているような気分というような、目で見えるような、やっぱりリオが終わりましたら東京ですから、目で見えるような生き方を見せていかなきゃいけないと思ひますので、それぞれいろいろ部分でやっているでしょうけども、それを一気にオリンピック・パラリンピックの看板がつけていいのか、どうするのかということ逆具体的に提案していただければと思ひます。

○セーラ・マリ・カミングス委員

私も全く同感で、いっぱい貢献したいし、精一杯頑張りたいと思ひ、でもこうした委員会に出席しながらも、どんなタイミングでどのように提案していけたら合格できるのかが、いまいちわからない部分があります。

やっぱり、このチャンスを失いたくないこともありますし、でも、この組織の外の方々がおさらどうやって関わりを持たれたらいいのかわからない。残念ながら、あまりよろしくない報道がいっぱいあるけれども、もっとこうしたいいい話題をいっぱいその報道が聞こえてこないぐらい皆さんが発信していただければ、もっともっと明るくなるように思ひますので、大いに期待したいと思ひます。

○布村副事務総長

ありがとうございます。このコーディネーター的な役割は、組織委員会というか、この委員会がぜひ果たしていきたいと思ひます。この場には東京都の方、文化庁の方もいらっしゃるの、実際にいろんな方々の御提案をいただき、今後、ホームページを開設したり、SNSでもうちょっと双方向の語り合いができるような場にしていければと思ひますので、そういったところで、今、コシノ先生もおっしゃっていただきましたが、いろんな御提案を委員の方々からも発信していただけるとありがたいと思ひます。

○中村企画財務局長

ありがとうございます。コシノ委員とセーラ委員からいただいたように、いろんなアイデアをどう結びつけていくかというところが今後、大事なところだと思っています。

まず、文化については、日本東京は、今でも非常に文化大国であって、いろんなイベントがいろんなところで開かれているんですが、せっかく2020年に向けて文化プログラム、文化オリンピックをやっているということで、やはり特色を持ったイベントができればいいと思っております。先ほど、東京都からお示しいただいたものでも、外国人向けとか、子ども向けであるとか、東京から全国に向かっていくとか、あと、伝統をきちんとしていくとか、ヘブンアーティスト東京のように外国の方をお招きするとか、TURNのように障がい者の方との交流を深めるとか、そういうのはまさに文化的なイベントそのものですが、非常に2020年とマッチしたようなイベントでございます。

また、松下委員から御紹介いただいたSummer Arts Japanもまさに札幌・長野・東京ということで、音楽のイベントですが、同時にいろんなところをつなげますし、オリンピックとも結びつくということで、こういった特色あるイベントができるだけ多く日本全国で開かれることを願っていますし、ぜひ委員の方々もこういったイベントをまた御紹介していきますので、このイベントをもっとこうしたらよくなるかもしれないといったアイデアが多分出てくると思っていますので、そういったものは都であるとか、政府であるとか、あるいは主催する者にきちんと伝えまして、今年は無理でも来年、これは毎年やってもらいたいし、2020年以降もやってもらいたいので、そういう中で皆様の意見がどんどん反映されるような形にできれば非常にいいのではないかと思います。

○布村副事務総長

日本文化の一つの推移であります歌舞伎の市川海老蔵さんや、日本画家の絹谷先生はいかがでしょう。

○絹谷幸二委員

やはり、これはお祭りなので、お祭りのためには伝統というのがまず片方にあります。もう片方には、そのお祭りのときに、例えばIBMのワトソン君のような、いわゆる時代が変わるときに、そういう筋目にも差しかかっていますので、そういう相反する二つの両極を双眼で見ているような催し物です。

例えば、東京都の事業を見ていますと、和の文化というか、そういうものはかなり出ていると思うんですが、それと同時にリオのカーニバルにしても、大体、ブラジルの半分の人口の人がそれを肯定していますけれども、半分の人たちは何か辟易しているところもある。そういうときには、やはり芸術・文化といった場合、いわゆる両極にあるものですね。例えば、絵画であれば、新しいコンテンポラリーアート、あるいはそういうものと古い日本の伝統的な絵画というふうにかなりそれを両方ミックスしていかないと、パーセンテージがとれない、皆さんの要求の全部をとりこくと思います。

ですから、常に、例えば太鼓なんかでもそうですけれども、いわゆる禪を締めて太鼓をたたいて、これが日本だと、こうやってやるのはいいのですが、では外国の人はそれをどう見るか。あれは、原始人のやることじゃないかというふうに捉えることもあるんですね。

そうすると、例えばニューヨークの打楽器の人たちは、何かライブで見ましたが、音のするものを全部集めて、日本の方もいらっしゃいましたけど、新しい形で打楽器というものをプレゼンテーションしている。

だから、常に、もし日本の打楽器をやった場合は、そういう新しい打楽器に対する感覚をセットで持っていくとか、それからオリンピック・パラリンピックといった場合は、健常者、何か体の御不自由な方という、そういう組み合わせでございますので、常に新・旧とか、水と油とか、それからいろいろ反語関係の言葉はたくさんあると思いますけれども、あるいは昼と夜とか、そういうものを文化の点でもオリンピックにまぜていくといいますか、そういうものをかみ合わせていく、こういう見方が、これが日本だということを提示する場合、すごく必要だと考えております。

私も今度、京都で「京都を描く」という展覧会をするのですが、そういった場合でも何か進取の気性を持って取り組んでいく。新しいものをやるときは、古いものを移していくとか、そういう二つの目線が必要じゃないかと思うんですね。そうすると、パーセンテージというか、国民の大多数の人たちの賛同をつかみやすいと、こういうふうを考えております。

往々にして、伝統を大切にすると、もう片方は敵に回すというふうな形になりがちですけれども、それをさせない。そして、文化庁がこの4年間の努力がレジェンドとして文化省に持っていくというふうな感じになっていけば日本のレジェンドの将来に対する発展、そういうことでもすごく貢献するのではないかと、思いますので、常に両極を見て、それは相対立するものじゃないということをパラリンピックでもオリンピックで見せていただければいいかなというふうに思います。以上でございます。

○市川海老蔵委員

皆様のお話を拝聴させていただいて大変勉強になります。文化という話の中で、例えば私は伝統文化というものの歌舞伎というものに、所属しておりますが、世界に通用する日本の文化とは何かということになってくると思います。今、先生がお話されたように、様々なものがありまして、古いものと新しいもの、私もそういう部分で日々葛藤を歌舞伎の中ではさせていただいております。では、世界に通用する文化は何かということで、10代の人、20代の方、30代の方、それぞれの世代の方に聞いたときに、多分、ばらばらしてしまうのではないかなというふうに客観的には思います。そういう中で、今回の2020年のオリンピック・パラリンピックについて、これを日本人全体が日本の文化、教育とは何かを見直すチャンスをいただいて、そしてそれをまた見つける、見つけなくてはいけないという大変さ、4年間という非常に短い時間の中でこの日本の歴史を再度ほどこいて、そして新しくきちんと皆で見つけて、それがまたレガシーとして今後、日本の文化はこうだったのだというふうに皆が思えるものをつくらないといけないということを、今、皆さん、先輩方のお話を拝聴しながら思いました。

そこに対して皆様のお話もありましたように、ではどこにそのアイデア、思いをぶつけていけば皆様とともにさまざまなジャンルの方々を手をとり合って進めるのかなというのが、私から見るとやはり皆さんと同じように、どこに何をすればいいのかというのが、なかなかわかりづらい環境にあり、今、ここに座らせていただいているという、これはやっぱりそこをまず

打開していかないことには、前に進みづらいのではないのかなというふうには、客観的には思っています。

○布村副事務総長

山崎監督は、以前、都内に怪獣を走らせる夢を語られていたと思いますけど、今日はどうでしょうか。

○山崎貴委員

日本の文化ということ言うと、漫画とアニメーションが足りていないなという感じがしますね。世界から見たときに、日本の特に若い世代のイメージというのは、漫画とアニメーションはすごく文化の一つとして大きいものだと思います。この委員会的にも、すごく立派なもの揃っているとは思いますが、そのような今までは、いわゆる文化の仲間になかなか入りづらかったものというのをもう少し吸収していかないと。海外の人たちが日本の文化に対して期待するものというのは、一つは本当に昔からある古典的なもの、これは絶対大事だと思うんですけど、それにプラスして漫画、アニメーション、それはすごく大事なような気がしますね。

あとは、やっぱりPRが心配というか、この文化オリンピックは知っているかということ周りに人たちに聞いてみたところ、ほぼみんな知らない。つまり、オリンピック・パラリンピックに付随して、この文化オリンピックという活動があるんだよということは、今までのいろんな国でやってきたこともみんな知らないですし、付随的なものだから、そこまでみんなが知らないのかもしれないですけど、それにしても知らない、知らなさ過ぎるというぐらいみんなが知らなくて、やっぱり一つ、オリンピックをやることに向けて、文化的なことでもオリンピックに近いことをやろうとしているんだよということというのは、みんなが知っていたほうがすごくやりやすいと思うんですけど、参加したくなる人たちもたくさん増えてくるだろうし、そういうことがあるんだったら自分たちもそこに乗っかきたいという人たちが多分増えてくると思うので、まずこの文化オリンピックということが存在しているんだよということ、どうやって広めていくかということが、今の段階はすごく大事なことのよう気がするんですよ。

今の段階で、それを広げることができれば、そこにいろんな人たちが自分の企画を、考えを持って参加していくことができると思うので、まずはそういうものがあるんだよ、それに参加することはなかなかすてきなことなんだよという気運を高めていく方法というのは、まず今の段階では非常に大事なことのよう気がしますね。

あと、これはこの会にはあまり関係ないのかもしれないですけど、先日、CMですごくいいなと思ったのを見たんです。パラリンピックの多分、選手の方ですね、片腕のない女性の方が泳いでいるのをいろんな子どもたちがそれを見て来て、感動しているというCMを見たんですけど、ちょっとパラリンピックに対する見え方みたいなものがすごく最近、変わってきているように感じました。昔は何となくオリンピックというものがあって、そこに障がい者の方たちも参加できるようなものを用意しなきゃいけないというような、半分、ちょっと義務を感じるようなにおいがしていたんですけど。最近、義足も物すごく格好よくなってきているし、進んできていますし、あと、車椅子バスケットみたいなものもすごく格好いいという、漫画の影響、井上雄彦さんの漫画の影響もあると思うんですけど、そういうものをすごい格好いいという風情が出てきて、今、何かパラリンピックというものに対して、障がいがありながらもそこで闘っている人たちというものがすごく格好いいという流れが、少し出てきていると思うんですよ。これ、凄く良いことだなと思っていて、やっぱり何かどうしても障がいのある方だと、みんなやってあげているという、ちょっと言い方は変ですけど、そういうにおいがしてしまうんですけど、むしろそっちのほうはそっちのほうですごく格好いいんだということをちゃんと表現できるものを色々発信していけば、何かパラリンピックの見え方自体がちょっと変わってくる気がするんですよ。

実際、若い人たちはみんな、すごくそういう義足の人であるとか、そういう人たちに対しての格好よさみたいなものに気づき始めているので、何かそこをもう少しプッシュしてやるということができれば、何かパラリンピックの見え方がこの東京大会で変わったねということが、文化的な方面でもそういうことを後押しできるようなことがあれば、何か凄い、すばらしいことになるんじゃないかなという気がします。以上です。

○織作峰子委員

山崎委員とちょっと重なりますが、やはり私もPRの方法、発信の方法について、すごく気になっておりました。我々の立場からすると、4年間というのはあっという間で短いと思います。けれども、一般の人たちの感触というのは、まだ4年あるという感じで、まだ盛り上がり足りていないというのが非常に肌で感じています。今後の展開として、フェーズⅠからフェーズⅡ、フェーズⅢというふうに期間を区分けしてわかりやすく図に表されていますけれども、今おっしゃったように、テレビコマーシャルなんかフェーズⅠ、フェーズⅡ、フェーズⅢと、オリンピックを意識した内容で、順に盛り上げていくような作り方を広告代理店や企業の方たちの協力を得て制作していくということがとても大事ではないかなというふうに感じます。

また海外に行けば、皆さん大概レストランに行ったり、いろんな方々と出会います。そんなときに、日本をPRできるように日本出国の際に成田などでOCOGマークの付いたカードのようなものを配布することで、出向いた先で配ってくれるはず。国民一人一人が広告マンのような意識を高めることにもなるのではないかと考えます。そのためにも、OCOGマークのデザインは早めに決める必要があると思います。一般の人たちにどうやって気運を高めていくかというのを早急に考えていかなければいけないなというふうに思っております。以上です。

○篠田信子委員

今、いろいろ皆さんからお聞かせいただきまして、全く私も同じです。私は北海道富良野から参りましたけども、想像以上に皆さん、何も知らないです。文化教育委員というのは、オリンピックの開会式のイベントをつくるために集まっていると言われるくらい、そのときのイベントのことだけを考えているのかというふうな考え方。

それと、先ほどセーラさんもおっしゃいましたように、課題、いろんなことを噴出してあります。だからこそ、この文化の力というのが発揮できるのではないかなと、ある意味、発想の転換です。今までは心が疲弊したときに世界の経済が谷になったときに力を発揮できるのは文化だと、いろんな文化事業の方たちはおっしゃってきたのだと思います。

こと、このオリンピックに関しても、そこ、ここで色々なことがあったからといってやめることでは絶対ないと思います。絶対、前に進むということ、当然そうなんです。ただ、東京から出れば出るほど、全くそのことに関してはだんだん、じゃあ、今回はオリンピックをやめるという話をしに行ってくるのみたいな、物すごく極端な話までするんですね。

ですから、そういう意味では我々は、いや、そうじゃない、今、オリンピックのいろんなプログラムが少しずつ浸透していくことによって、だんだん、あってよかったオリンピック。そのためには、やはりこういうオリンピック委員会の中でいろんなプログラムは、やはりつくらなきゃいけないと思います。東京都なり文化庁なり、いろんなところでつくられたものが各地域、自治体に行けば行くほど、それが押しつけられたものじゃなくて、一緒に自分たちも何かやっているというようなことでの、何か一つ味つけをしなければならぬんじゃないかなというふうに感じます。

これは例えばオリンピック委員会からこの事業をどうですかと来たときに、皆さんおざなりにといいますか、やったとしても、それが本当にみんなの中で燃え上がっているかどうかということになると、本当にその辺りが難しい。我々、幸いに地域から出させていただいているので、今まで何回も出ています日本にある非常に特異な子どもたちの運動会みたいなところでのイベントに音楽とダンスをコラボレーションして、それをどんどん4年の間に各学校で踊られるオリンピックの何か気運を盛り上げていくというような形では、物すごくそういうことを私も富良野の中で雑談話に言うと、それはいいよねと皆さんおっしゃるんですね。というのは、体を動かして乗りに乗って楽しくできる、とにかく楽しくなきゃならないという辺りでは、とても素直な意見だなというふうに伺ってきましたので、今のように素晴らしい委員の方たちがいらして、プログラムは何かあれば何かやりますよとおっしゃる方はたくさんいらっしゃるの、ぜひそこをコーディネートしていただきたいなと考えております。

東京都は東京都で、こういうプログラムをたくさんつくっていますけれども、やはりそれらが私たちにとっても文化庁とこの委員会と東京都のばらばらな関係といいますか、全く私たちには見えていませんし、それがきっとこれから融合していくんだと思うんですけども、そういう辺りのことを鑑みながら進めていかなきゃならないかなと思います。

それと、もう一つ、できるだけ平たい言葉を使っていたきたい。あんまり片仮名、片仮名でインターネットや何かに載せられても、多分、わからないと思います。聞くのも恥ずかしいなと思うようなことにもなるかもしれないので、日本語で伝えられることは日本語でというようなことをぜひ努力していただきたいなというふうに思いました。

○布村副事務総長

ありがとうございます。4年後には、富良野でも文化オリンピアドという言葉がみんな知っているようになるように努力したいと思います。青柳先生、どうですか。

○青柳正規委員長

今、文化庁にいるときも、この文化プログラムはいろいろみんなでおしゃべりというか、検討してきました。やっぱり、前のことを思うと、64年のときは三波春夫のオリンピック音頭ですか。

○布村副事務総長

東京五輪音頭。

○青柳正規委員長

東京音頭があって、それから札幌のときは男の人と女の人が二人で歌った、札幌の空には何とかという歌があったりしましたね。

○布村副事務総長

虹と雪のバラードです。カラオケの世界なので。

○青柳正規委員長

やはり、そういう皆さんが日ごろ接触できるようなものが何かそろそろ考えなくちゃいけないんじゃないか。ちょうど、あそこにNHKの人が来ておりますが、それで、僕がこの機運醸成というか、文化的なものをもっともっと早くから広めるには、やっぱりメディアの協力がどうしても必要で、それで文化庁にいるときは、2年ぐらい前からNHKの若手のプロデューサーやディレクターと酒飲みをやっていました。

それで、文化プログラムを取り上げてもらおうと、だから、そろそろ素人のど自慢じゃないけれども、文化プログラム候補になるようなものをNHKで週に1回ずつぐらい取り上げてもらって、それがだんだん2020年に近づいたら民放ともリレーしてやっていくというような、そういうこととか、それからずっと昔ですけども、ニューヨークで三番叟を歌舞伎と能と、それから狂言と、それと沖縄の組踊なんかでね、つまり少しずつ違う分野で同じ三番叟をやってもらったら、これがニューヨークでやったんですけど大変な評判になりました。ですから、いろいろなちよつとした組みかえで、我々が日ごろ親しんでいるものが、よみがえってくるんです。

例えばこれも今、思いつきですけど、コシノジュンコさんが去年でしたか、琳派展のときに京都美術工芸大学の学生たちを使って、山に入っているいろいろなさいましたよね。日本は、東南アジア全部そうですが、竹文化がすごいんですね。しかも、この竹をタケノコなど、食べるころから始まって、大変な人間国宝の工芸品として、今、アメリカではいいものが日本では買えないぐらい人気があって、それでいて竹とんぼのような普通の遊びものもあるし、それから竹でつくった舟やバンブーハウスもある、というようなテーマのつくり方。

さっき絹谷さんがおっしゃっていた新と旧、あるいは国内的なものや国外のもの、違う対局にあるものをどう組み合わせるかも、いかようにでもできてくると思うんです。

それから、例えば今、珠洲市が、能登半島の先端ですけども、あそこは行き詰まりなので、通過する自動車がないということで、金沢大学と組んでまちの中を自動運転の実験場にしており、非常に成功している。そういう土地土地

の特性を生かして、あそこは人口1万2,000人なんだけど、お祭りが春祭り、夏祭り、秋祭り、すると51か54あるんですね。その一つ一つがすごく立派な山車を出して、住民がそのために半年ぐらいはお祭りのことだけ考えているんじゃないかと思うぐらい、これは珠洲市だけじゃなくて福岡でも、岸和田でも、いろんなところがそうですけどね。そういうものをほんのちょっと手をかけたりするだけで、すばらしいものになるんですね。

それから、秋田の竿燈であるとか、あるいはねぶたであるとか、だから、そういうものを早くリストアップすると同時に、その中で先ほど、いろいろコンセプトや制限がありましたけど、そういうものでのふり落としながら、だんだん見えるものに早くしていくと。そのことが富良野でも誰もがオリンピックを知ることになっていくでしょうし、それから8月ごろですかね、ラベンダーを刈り取るときに、おばさんたちがみんなオリンピックの歌でも歌ってラベンダーを刈り取ってもらえるようになれば、これはもうそれで成功ではないかなというふうな気がします。

ですから、リオが終わりましたら、皆さんの一つ一つの今日の御意見やアイデアというものをなるべく早く頭出しをして、そしてそれを横につなげていって、そして1足す1が5ぐらいになるような効果をもたらすようにしていくということではないかなと、今、大変貴重な御意見を聞きながら感じていました。

○セーラ・マリ・カミングス委員

ありがとうございます。せっかくNHKさんがいらっしゃるならば、やっぱりニュースで取り上げていただくよりは、モーニングドラマに何かオリンピックの志を目指す選手の物語ができるほうが一番、国の人が見てくれるんじゃないかなとか、もしできたらうれしいと思います。

また、長野オリンピックのときに、1校1国運動が初めて一つの学校が一つの国を学んで、その国の選手の方々と触れ合おうとか、その国の料理を食べるとか、その国の試合を応援するとか、ホームステイだの交流があったのですが、そのプログラムがオリンピックの後に公式のプログラムになりまして。今、オリンピックの制度の中に取り組みされているものなのですが、東京オリンピックのとき、せっかくオールジャパンの位置づけであるからこそ東京都内だけの学校でなく、全国の学校がどこかの国とタイアップができるようなことを、日本は小さいですから、大きく見えても、やっぱり皆、また連携をとり合う大きなきっかけになれるんじゃないかなと思って、せっかく日本で発案された提案ですから、東京でレベルアップした本当に国を巻き込む力になっていけたらうれしいと思います。

○布村副事務総長

今、1校1国運動が出ましたので、オリンピック競技の御専門の真田先生、深澤先生、そういうオリンピック教育と文化プログラムの連携なんかも含めて教えていただければと思います。

○真田久委員

私も教育、それから、文化プログラムですね、これを何とか連携させたいと思っていて、今年の2月に京都府の教育委員会と筑波大学と連携しまして、オリンピック・パラリンピックを通じた文化・芸術の融合を考えようと、フォーラムを開催いたしました。

何をやったかといいますと、高校生に短歌をつくっていただいて、そしてスポーツ精神とかオリンピック・パラリンピック精神について詠んでもらうと。それをコンクール形式でやりまして、高校生からたくさん応募していただいて、その発表を京都の金剛能楽堂でやったんですね。冷泉貴実子先生などに来ていただいて、古典和歌の紹介などもしていただきながら、高校生に短歌を詠んでいただきました。結構、おもしろい短歌が出てきました。

ちょっと紹介しますと、佳作になった作品ですが、例えば「誰もが たったと思うコンマの差 選手にとっては 天と地の差」、それから「あと1秒 あと1センチ あと1点 そのあと1を 超えていこう」、こんなような短歌が出てきて、非常にオリンピック・パラリンピックというテーマにしてもおもしろい短歌ができるんだなということを実感した次第であります。

これをこれから英語でも短歌を募集したらどうかなと思っておりまして、外国でも結構、今、俳句や短歌を勉強しているところが多いですから、ソチのオリンピックのときにも幾つかの学校では日本の短歌を勉強していましたので、そういうところからも募集して、例えば京都のようなところで短歌の発表をするなんてしたら、まさに古代ギリシア時代の詩歌の伝統が2020年で合体できるんじゃないかと、こんなふうにも思っているところであります。

私は今まで、オリンピックの文化オリンピックで非常に印象に残っているのは、2004年のアテネオリンピックのときだったんですね。このときには、アテネの古代の劇場、音楽堂で日本の亡くなりました蜷川幸雄さんが演出をされたオイディプス王、委員の野村萬斎さんが主演で麻実れいさんが出られた劇なんです、観衆はほとんどギリシア人とヨーロッパ人なんですね。

オイディプス王の物語は日本語で、しかも日本的な衣装と日本的な雰囲気で行ったわけなんですね。しかし、スタンディングオベーションを受けて大喝采を受けました。オイディプス王はギリシア人にとっては誰でも知っている物語なので、ストーリーはわかると思うんですが、日本語でやってもそうしたものがちゃんと感動が伝わるという、その姿、これこそがある意味、オリンピックの文化プログラムなのかなと思った次第であります。ですから、例えばニューヨークの劇団に来てもらって歌舞伎をやってもらっちゃうとか、そんなような発想があってもいいのかなと思うんですね。そこからまた新しい文化というものが生まれるのではないかと、こんなふうにも思った次第です。

これまでの文化関係のイェを見てみますと、日本文化をいかに発信するかということにちょっと強調されているようなんですけども、それだけではなくて世界の文化をどう取り込むといいますか、例えば2020年に東京に来れば、世界の最先端の文化が全て見えるという、そんなような発想で考えてもいいのかなと、そんなふうにも感じました。以上です。

○深澤晶久委員

私は、真田先生のようなオリンピック競技の大家でもないのですが、組織委員会の大学連携チームの方からは、現場の

大学生と日々接している立場の教員として、とにかく出来ることからやってほしいということはずっと言われておりましたので、まずは、私が担当している授業から始めました。昨年12月には、真田先生をはじめ多くの方のご協力をいただいて、授業を履修した学生がリーダーになって、首都圏の5大学の女子大生約50名に集まっていたいただいて、オリンピックについて考えようというワークショップを開催しました。今年の12月には、第2回目を予定しており、もう少し大学の連携を広げようというような流れをつくっています。

一方、今の大学生は、残念ながらオリンピックオンタイムには、もう社会人になってしまいますので、高校生・中学生までどう広げていくかということが、課題になっております。今年の8月には私の授業を受けた大学3年生が、今度は、高校生を巻き込んでオリンピックについて考えるようなワークショップをやりたいと自主的に手を挙げてくれましたので、夏休み期間中に、今、東京以外に京都と、埼玉、神奈川を含めていくつかの都道府県にまたがるんですけども、高校生40人ぐらいを渋谷にお招きし、大学生が中心にワークショップを進めるということを考えております。

ですから、大人ではなくて、大学生と高校生という関係の中でワークショップを進めようというように動いています。これはあくまでも教育プログラムのだ真ん中だと思いますが、ワークショップが終わった後、打ち上げといっても、当然アルコールは飲めないで、ティーパーティーをしようという話になったときに、大学生、と高校生ですから、スイーツには目がないわけですね。そこで、和菓子というのは、非常に大事な日本文化だと私は考えているので、参加してくれる高校生には、地元でしか味わえないというか、地元の知人ぞ知るというこだわりのあるお菓子というものを持ち寄ってもらって、それが地元にとってどのような意義があるのということも考えてみようというようなことを仕掛けています。

高校生が、当然芸術、音楽、そうしたものでよいのでしょうか、身近なところでいけば、「和菓子」の文化というものを考える機会にもなるかなということです。

今の高校3年生が、4年後は大学4年生になりますが、ちょうど7月というのは、就活で忙しいでしょうから、むしろ高校2年生、高校1年生と、この世代が、オリンピック本番のときに大学2年生、3年生ということで、中心に関わる存在だと思いますので、そうした高校生にオリンピックとは何かをつくづく考えてもらおうと考えています。

先ほどからどう発信していいの、確かに私も非常に迷っているところではありますが、オリンピック規模のイベントですから、全部出来上がってからということも、もちろん大事なことで同時に、やっぱり現場発で、それぞれの大学連携チームのそれぞれの先生なり、これに関わっている人たちが、できることから動いていって、もし、その話の実現したら、それを組織委員会の方にも見ていただいて、こういうものが文化・教育プログラムに発展をしていくのかどうか、ぜひご指導をいただきながら、小さく産んで大きく育てていくことで、レガシーとしてつなげていければいいなど。それがムーブメントになっていければいいな、そんなことを考えてアクションを起こしているところでございます。

○松下功委員

今、私も、深澤先生、真田先生とともに、いろんなお話をして、芸大でも、実は、学生たちにオリンピックの話をする機会が出るんですけど、大体みんな、冷めているんですね、これが。「だって、スポーツ関係ないもん」とか。そんなことはないんだって話をいろいろしています。皆さん、ここにいらっしゃる方は、反対はしていないわけですから、やっぱりできれば皆さんが、いろんなところへ足を運んで、何をするのかという話をあげたらいいなと思うんです。

実は、最近小学校に呼ばれて、皆さん夢を描く場なんだという話をしているんです。みんなの夢を少しでも大きな夢をかいていけば、きっと何かに関われるよという話をしている。最初、みんな、冷たい顔をしているんですよ。オリンピックというと、中には、「お父さん、反対しているもん」みたいな顔がいます。でも、やっぱり君ができることはなに、と順番に話して、夢を小学生たちに育てていく場にならなきゃ何の意味もないような気がしているんです。それで、私は、これからも積極的にいろんな小学校に行こうと思っています。本当に皆さんが足をいろんなところへ運んで、対話をしなきゃいけないんじゃないかなと思っています。ここにいらっしゃる委員は、特にとっているんです。一つの例なんですけど、ある小学校が、「何をやろう、先生」というんで、じゃあ、一緒に歌をつくろうと、歌をつくってみました。みんなオリンピックのことを考えて作りました。これが全国で展開してくれないかなと思ったんですね。

例えば、北海道の富良野で、富良野の作家と作曲家が、こっちから行くのではなくて、それぞれが何か考えて、みんなが、それが何十も集まったら、大会を開こうよ。今、大事なものは、高校とか小中学生。今、高校生とおっしゃいましたが、やっぱりそういう若い人たちが、今、夢がないんですよ。だから、このオリンピックは何なのか。「夢を描く場だ」と言ってあげないといけないような気がしています。それで、今、できるだけ私も、そういう場に足を運んでいきたいと思っています。ですから、本当に教育がとても大事なんじゃないかと。我々、イベントを実施するだけでも、そのイベントに小学生、中学生が参加できるという夢を描いてくれたら、どんどんその後のレガシーになるのではないかと思います。私にとって、2020年のオリンピックは、夢を描く場と思っています。

○中村企画財務局長

ありがとうございます。一つ、皆様にお伺いしたいのは、事務局で今申し上げたように、認証の仕組みをやっているところでございます。それで、織作委員もありました、PRが大事だということで、一つは、やはりそのマークをつけるということが、非常に大事だと思っていますし、篠田委員がおっしゃったように、それが押しつけではなくて、皆さん、いろんなところの発案に対して、それを我々として、一緒にイベントだよということでマークをつけていくと。そのマークを見ることで、2020年が近づいてきたんだということで、この認証というのは、非常に大事だと思っています。

それで、説明の中でも申し上げたように、最初は、ちょっと我々の事務的なマンパワーの問題もありますし、何分初めての話でございますので、都であるとか、国であるとか、あるいは、地方公共団体が主催する、まずはイベントから始めていこうと思っておりますけれども、だんだんとその、もっと一般の団体、その営利性だけはチェックしなきゃいけませんけれども、一般の団体に広げていかなきゃいけないと。広げるべきだと思っておりますが、その中で、その質か量かと。

ちょっと極論を申し上げますと、文化としてその水準を求めるべきかどうかというところが、非常に将来、来年とか再来年、悩みにぶつかるんじゃないかと思っています。非常にクオリティーの高いもので、あればあるにこしたことはないんでしょうけれども、あまりそのマークを与えることで絞り込むのがいいのか。絞り込まずに、参画だということ

でつけるのがいいのか、あるいは2020年以降に続けようということなので、参画と、あとは、4年間ちゃんとやりますかとか、その後も続けるんですかというところをチェックポイントにするべきなのかどうかとか、あるいはもう根源に行きますと、その文化とは何なのかとか、これは、文化プログラムなのかどうかということまで行くのかもしれないとは思っているんですけれども、そこら辺について、あまり細かなことを言うべきじゃないよとか、あるいはやはり、なるべく高いものを絞り込んだほうがいいよとか、そういった御意見をもし、お聞かせいただけるとありがたいと思います。

○セーラ・マリ・カミングス委員

長野オリンピックのときもやはり、地域の人たちが、世界に通用するものができるのでしょうかみたいな組織委員会の中の空気があったんですが、実際、活動として残っているのが、グラスルーツの自ら頑張ろうとした住民の頑張りが残っているんです。それで、やっぱりものが育っていくのは、いきなり完璧なものではないかもしれないけれども、参加できるということがないと、違う人の国のオリンピックみたいなことにもなりかねないよなとか、他人みたいな感じになるよりは、巻き込んでいけるような形で、水準が難しいかもしれないけれども、何となく大手のところに任せると、もし、うまくいかなかったら、大手のせいですとか、そういう感じよりは、オールジャパンのグラスルーツを大切にする体制ができたなら、ありがたいなと思います。

○今中博之委員

友人のシンクタンクの方が、ロンドンの調査をしまして、英国全土で1,000カ所以上ライブあり、路上あり、何回か英国へ行かれて調べたらしいのですけれども、詳細までは調べ切れなかったという報告が上がっているのですね。それぐらい津々浦々でやっていらっしゃる。文化とは何かとなったときに、どこかで集約はしていかなきゃあかんのだろうけども、僕は、リオ以降は、まずは拡散をして、どういう意味が上がってくるのか。今まで、僕は、すごく印象に残っているのは、今回のエンブレムでも、無名な方々が、非常に成果を出したという結果でした。とてもいい記憶に僕はなっているんですけれども、何か有名どころが引っ張って、CMをつくって云々ということではなくて、そのCMのつくり方も、例えば、九州新幹線のようなCMのつくり方。一般の方々が参入をしてということが、きっとこの我が国のオリンピックといったときには大事であるし、まだ4年、ないよであるので、そういう意味では、まずは拡散をして、いろんな方の声を聞き、いろんな作品を見ていくという、我々ボードメンバーはしんどいと思うんですけども、僕は、大事になってきて、最終クオリティーということと国民は求めてくると思うんです。エンブレムも同じように。

そうなったときに、おのずと何十個なのか、数個なのか、日本をリードするイベントなり、芸術では、きっとピックアップされるだろうなとエンブレムを通して思います。

○市川海老蔵委員

僕も同じような意見で、多くの方々にやっぱりやっていただいて、こういうのも大丈夫なんだとみんなが思うことによって、より多くの人たちが参加できる。そうすると、やっぱりこれがだめだった。僕はできない、私たちはできないかもというような発想をまず、なくすことが、大事だと思うんです。そして、その中でやはり、今、おっしゃられたように、最終的に皆が納得するものしか残らなくなってくると思うんです。ですから、最初は、やはり多くのものを広げていく。その広げていくということが、今一番、僕は大事だなと思いました。

○セーラ・マリ・カミングス委員

そのオリンピックまでに声を上げていくという勇気を出した人たちを、何とか気持ちを落とさずに、地域の気持ちを持ち上げていける体制ができればと地方にいると思います。この前、ロンドンオリンピックの形は、地方の提案に対していろいろな問題が、どうしてだめなのかを考えるよりは、どうすればいいのか。例えば、バスの手配などをどうやって人を送り込むのか。そういうフォローをきちんと組織的にフォローした結果で成功させたとも聞いて、納得できるものがあつたんだなと思いますね。

○布村副事務総長

多分この認証の仕組みは、最初、御相談させていただいて、一定の基準をつくって認証が始まるんですけれども、できるだけ今おっしゃっていただいたように、幅広い方々に御参画をいただいて、数が増えていくと、多分、こちら組織委員会や文化庁、東京都だけでは、賄い切れなくなって、各地方の都道府県の県庁の文化担当のところにも認証を委ねていくと、そんな流れができていければいいのかなと思いますので、できるだけそういう流れにつながるように工夫はしたいと思います。

あと、今御質問があった、オリンピックの歌やこの認証に委員の方々がどう関わるとか、あと、ピンバッチも間もなく無償配布できるものが委員の方々にもお配りできると思うんですけど、そのあたりを少し事務局から御案内していただいでよろしいでしょうか。

○中村企画財務局長

はい。まだ、検討途上なんですけれども、オリンピック音頭ですね。どういう名前かは別として、そういうものは、できたらいいなと思っておりますし、じゃあ、それをどうやってつくっていくのかというのは、また、考えていこうと思っておりますけれども、多くの方が期待をしていますので、何か形にできればと思っておりますけれども、今日は、もう全部オープンですので、あまりやりませうと、また、勇み足だと後で怒られてしまうんですけど、前向きに検討したいと思っております。

あと、認証は、恐らく様々な、多くのものが出てきますので、一件一件マークをつけるかどうかといったところは、事務局のほうでやるのかなと思っておりますけれども、ぜひ非常に大きなイベントであるとか、非常におもしろい取組につきましては、ぜひ御紹介するとともに、先ほど申し上げたように、ここをもうちょっとこう変えようというふうなア

アイデアができれば、ぜひ、それをフィードバックしていきたいと思っております。

また、ピンバッジは、ちょっと確認します。今、つくっておりますけども、できれば、皆様にもお送りをしようと思えます。

○松下功委員

そのエンブレムは、立体になるのでしょうか。というのは、視覚障がいの方と話していると、さわらないとわからない。やっぱり見ていると立体になりそうな感じがしますし、ぜひ立体というのを御検討いただきたい。立体、つまりさわって、わかるようなエンブレムになるといいと思います。あれはできますよね、十分。そういうこともちょっと含んでいただけたらと思いました。

○中村企画財務局長

はい。

○コシノジュンコ委員

色は決定ですか。

○中村企画財務局長

はい。こちらのものがエンブレムとしての正式のものでございますけれども、展開というのをこれから考えていこうと思っております、松下委員がおっしゃったように、立体的にやるものも一つの展開だと思えますし、コシノ委員がおっしゃったように、色をちょっとカラフルにするとか、色を変えてみるといったものも、今後、考えていきたいと思っております。

○絹谷幸二委員

そうすると、その認証マークもですね、例えば、赤、青、黄色とかね、色分けすることもある。それから、資料を見ていると、非営利と言っておりますよね。ロサンゼルスなんかは、どうだったのですか。かなり非営利じゃなくて、何か赤字にならなかったというのがあるのでしょうか。

○中村企画財務局長

絹谷委員がおっしゃったところが、一つのポイントでございまして、まさにロサンゼルス以降、いろんなスポンサーシップをとっております、組織委員会も、今、IOCが募集したスポンサーと我々組織委員会が契約しているスポンサーがございまして。そういった方々は、そのスポンサーとして我々に協力する対価といたしまして、このエンブレムを使う権利がございまして、また、OCOGマークを使ったイベントにも携わることができるという一方で、非常に難しいところが、その非スポンサーの営利企業が、このマークを直接使いますと、これは、スポンサーシップとの関係で抵触してしまうということで、スポンサー以外の団体が使う場合には、非営利性を求めるというのが、この、IOC、IPCのルールでございまして、そこは、我々は遵守しなきゃいけない立場でございまして。

そういった制約のもとで、じゃあ、どれだけ多くの方に参画していただくかというのは、多分いろいろ仕組み等で工夫のしどころもあろうかと思っておりますので、そこは、今後、検討していきたいと思っております。

○真田久委員

ちょっと細かい話で恐縮なんですけど、このエンブレムの入った文化教育委員の名刺などは、つくっていただけないのでしょうか。といいますのは、やはりその名刺がないと、文化・教育があるんだということをなかなか周りにも浸透できないと思っておりますので、そういうこともちょっと考えていただけたらと思います。

○中村局長

検討しましょう。

○今中博之委員

確認なのですが、フェーズⅢの全国展開期間は、2018年4月以降とありますよね。この辺の時期に、例えば、46都道府県のリーダーの方々和我々がお会いをするというようなことを想定されておりますか。ロンドンで言えば、大体オープン2年前ぐらいから、そういう団体の方と密に、このボードメンバーが絡んでいったというような形らしいんですけども、この全国展開というのは、どのような形なのでしょうか。

○中村企画財務局長

鋭い質問で、これは、まだイメージ図で、全国に展開するだけでは、全国の自治体のイベントについては、もっと早くから展開していこうと思えますけれども、先ほど申し上げたように、我々の受け手側の体制もあるものですから、だんだんと上げていこうということで、2018年4月という時期も、これまだ全くの未定でございまして。

それで、ただ、他方で、このディスカッショングループないし、委員会のメンバーの方々という地方、地方で、文化事業に携わっている方々の意見交換の機会とかは、ぜひつくっていききたいと思っておりますし、最後は、この2020年に向けてどんどん広げていこうと思っておりますけれど、最後の集大成は、この図にありますとおり、tokyo2020フェスティバルということで、まさに2020年の大会の直前にかけて、この4年間の集大成とも言えるイベントをどう、この数カ月に集中していくかということですので、そこら辺の立てつけについては、この皆さんのディスカッショングループの御意見をぜひ聞きながら進めていきたいと思っております。

○今中博之委員

一番ポイントなのが、このボードメンバーと、例えば、46都道府県のリーダーの方など、団体の方といかに息が合うかだと思ふんです。そういう意味では、例えば、46の方々をコンペティションで選ぶのか。それとも、挙手をされた方が、わかりません、始められた方とするのか。先ほど、データがちょっとクオリティーの話もありますので、その辺は、我々の中で合意をもって、今後、進めていかなきゃあかんと思う。

○セーラ・マリ・カミングス委員

今、46都道府県をみんな巻き込むやり方としては、リオの後のすぐに、みんなお忙しいと思ふんですが、時間をつかって、1件ずつの総合シンポジウム、オリンピックに向けて、その県の全部、例えば、商工会議所の会長の方々や農業委員会の会、みんなトップの方々の組織票を持っている人、ボーイスカウトもガールスカウトもみんな巻き込んで、オリンピックを盛り上げていく。

それで、皆さんは、多分報道だけでは、すごく遠い存在になるから、フェイス・トゥー・フェイスで、本当に自分たちの頑張り期待されていると思ってくれるようになると、すごく時間はかかるけど、効果的。

そこに、実際、五輪に参加したオリンピックの、例えば金メダリストの人の基調講演をすとか、それで、やっぱり若い人にその夢を提供したいとか、そういうような何か全国を回っていく地方創生のシンポジウム等を生かすようなこと、わからないけど、何か実際、フェイス・トゥー・フェイスで、それで、「よーし、えいえいおー」みたいな感じでできたらいいなと思ふます。

○篠田信子委員

認証の件なんですけども、これは、大きく公式なものと、公式とまでは行かないけどもということ、まだ案の段階ですけども、仕分けしていますけども、もう一つ、本当に、例えば、子どもたちが、「僕たちが応援しているよ」と、じゃあ、そういうときに何でもいいんです。こんな公式でなくてもいいんですけど、そういうような応援している応援バッチみたいなのは、例えば、町内会で運動会をしたときに配れる、オリンピックを応援するよ、という形でやっていくと、子どもたちも、もっともっと気楽に応援できるのでは。やっぱり認証となると、それなりのいろんなこともあるでしょうけども、気楽に地域の子供たち、地域の人たちが、例えば、富良野で言えばへそ祭りという、ずっと続いているそういうお祭りでも、オリンピックは我々も応援しているよということをつけながら踊るというような、もっと気楽な形での、このマークなり、ワッペンでも何でもいいんですけど、そういうのも一つあれば。それは、例えば、つけて何かしても、そんなにそれほど権威的なものでもないですし、ただ、自分たちのやったなという誇りになるようなものもあれば楽しいんじゃないかなと思ふました。

○布村副事務総長

ありがとうございます。そういう全国的な盛り上げりのためには、できるだけ参加していると、一緒になってつくっているという意識が湧くように、当初、こういうピンバッチも売らせていただいて、稼ごうかなという話もあつたんですけれども、やっぱり盛り上げりのためには、少し無償で配布するということも考えて、一緒になってつくっていただくような流れをぜひつくりたいと思ふます。

今日も、そういう面では、PRするか、特に全国の巻き込みのためのいろんなことの御示唆をいただきましたし、あと、多様性と調和ではないんですけど、日本の文化の世界の発信とともに、いろんなジャンルの文化を組み合わせ、新しい日本の文化が発見できるような、見詰め直す機会になればと、そんないい御意見をたくさんいただきまして、そういう趣旨を、また、この文化オリンピックの中にあるような盛り込んでいって、今後の予定としては、7月14日に、資料4にあります文化・教育委員会という全体会を予定しておりますので、そこで文化オリンピック、あるいは、教育プログラムについて取りまとめていただいて、7月25日に組織委員会の理事会を予定しておりますので、そこで、一応決定をいただいて、公表する。我々がリオオリンピック・パラリンピックの機会にしっかりリオのやり方を学んだ上で、リオが終わったら、本格的に文化オリンピックがスタートする、アクションが始まると。今後、そういう流れで進んでいきたいと思ふています。では文化庁の磯谷さんから、どうぞ。

○磯谷文化庁長官官房審議官

補足説明だけ口頭でさせていただきますが、いろんな方たちからもありましたけれども、文化庁も全面的に組織委員会と連携を図って実行していきたいと思ふています。

それで、本日、コンセプト等々が配られておりますので、これに沿ってできるだけ実行できる体制と、また、予算要求などもしていきたいと思ふていますんですけども、現状を申し上げますと、今年度の予算、文化庁全体の予算は、1,000億円ぐらいあるんですが、直接文化プログラムに使っていただきたいということで確保しているのは、130億円ぐらいありまして、それは、既に民間の方の公募をしたりとか、公立の施設で活用するというので、大体予定は決まっています。例えば、この秋は、メディア芸術祭が20周年であるということで、秋葉原なども会場に行う予定ですし、それから、芸術祭、あるいは国民文化祭はアーチでやるとか、そういう文化庁主催のものもありますし、先ほど、ちょっとお話が出ていましたけれども、いろんな地域の仕組みを補助する事業はもちろんありまして、例の直島の瀬戸内のやつですか。そういったものも文化庁は、補助金を出していますし、そういったところは、自治体が御自分たちのぜひ自主的判断を発揮させて、この認証に当てはまるものをどんどん出していただくということが、多分今後の話になってくるかと思ふますし、文化庁としても、今回の基準などももとに、今、我々が持っている例えば、戦略的芸術・文化創造推進事業なんていうのがありますが、こうしたものが適合できるような形に変えていくとか、そういったことを概算要求に向けて検討していきたいと思ふていますし、組織の窓口ということも、文化庁として文化プログラム推進室というのをこの4月に発足させましたので、文化庁に何か御相談があるときには、そこに行っていただければ、すぐに対応できるように体制を組んでいきたいし、それは、組織委員会とも共有していきたいと思ふています。

○布村副事務総長

青柳前文化庁長官のもと、委員会が行われておりますので、この委員の方々には、文化庁から優先的に御支援を賜りますよう、お願い申し上げます。では事務局より今後の予定をお願いします。

○堀アクション&レガシ-担当課長

次回の会議の予定でございますが、先ほど、御案内申し上げました教育ディスカッショングループにつきましては、今月、27日、月曜日の13時から予定してございます。文化・教育委員会につきましては、7月14日、木曜日、14時から予定してございます。詳細につきましては、また別途、御案内申し上げます。よろしくお願いいたします。

○布村副事務総長

本日は、文化のディスカッショングループにも教育のディスカッショングループの方々にも御参加いただきましたので、もし、御都合がつけば、その6月27日の13時から15時の教育ディスカッショングループにも、文化・芸術の関係の方々も御出席いただければと思います。それから、7月14日は、木曜日、午後2時から4時に文化・教育委員会全体会を予定しておりますので、よろしくお願いいたします。青柳先生、よろしいでしょうか。

○青柳正規委員長

では、一つだけ。いろいろな文化が幅広くさまざまに行われることが大切だと思いますが、去年の夏、ギリシアのエピダウロスというところ、古代のギリシア劇場が残っているんですけど、そこで、梅若玄祥さんが、オデュッセイアの中の冥府行という場面だけを取り上げて、新作でギリシア人のプロデューサーのもとで、その夏、ギリシアでやったんですね。それで、これをNHKが放映しまして、すばらしい、そして、見に来た人たちも、ギリシア人がほとんどですが、大変な数の方々感動したのを見てですね、やっぱり文化の力というのは、言葉を超えてあるんだなということをつくづく思いました。それで、その一方で、それこそ阿波踊りにしても、あるいは、夏祭りにしても、参画する人のほうが、見ている人よりも楽しむような文化もあると。

その範囲をみんなで広く捉えながら、日本という地域、あるいはそれぞれの県の地域、あるいは、限界集落の地域のそれぞれの全てに、この文化プログラムが地域興しとして作用することができれば、2020年以降の日本も決して捨てたものじゃなくなるのではないのかなという希望を持っています。よろしくお願いいたします。

○布村副事務総長

ありがとうございました。それでは、以上で、今年度、第1回目の文化ディスカッショングループを閉会とさせていただきます。今日は、ありがとうございました。